

日本科学者会議 福井支部ニュース

第2号 2002年7月5日発行

- ** 日本科学者会議福井支部
- ** 〒910-8507 福井市文京3-9-1
- ** 福井大学 アドミッションセンタ 大久保貢研究室 気付 Tel 0776-27-8644
- ** ohkubo@kyomu1.fuee.fukui-u.ac.jp
- ** 郵便振替口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部
- ** ホームページ <http://www.jsa.gr.jp/fukui/> (本部のページ <http://www.jsa.gr.jp/> からたどれます)

今号の内容

- 新事務局長あいさつ (大久保貢)
- ほうこく: 北陸地区シンポジウム「日本海の自然を守る」開催 (高木秀男)
- あんない: 日本科学者会議ホームページに会員専用コーナーを新設
- 編集部から: 「福井の科学者」88号の概要紹介 (山川修)
- 寄稿: 「住んでみて感じたアメリカという国」その7 - 車 - (永井二郎)

新事務局長のあいさつ

大久保 貢

日本科学者会議福井支部第32期の事務局長になりました福井大学の久保貢です。日本科学者会議福井支部に入会して4年目にして事務局長の大役が当たり、何かやり残していないかとの心配とこの忙しさに負けてたまるかという気持ちで過ごしております。

今の現代社会はある種の閉塞感に満ち満ちていますが、日本科学者会議福井支部の科学者が、実験室に閉じこもっているのではなく市民の間に出て行って、地域に根ざした活発な活動と行っていきたくております。そして、この閉塞状況に対して現場と地域(市民)と大学とをモットーに積極的な活動をすることによって蟻の一穴でもよいから穴をあけ、日本科学者会議福井支部から新しい風を地域に吹き込むことができないかと思っております。どうぞ、皆様のご支援を宜しくお願い申し上げます。

2002年度 日本科学者会議 研究基金研究助成の申請を受付けます

支部の研究活動に、本部から助成します。 締切り期限: 2002年10月31日
希望する会員・グループは、支部事務局まで連絡下さい。申請用紙をお渡しします。

お願い: 2002年度会費未納の会員は至急納入下さい。

過去の会費未納の会員は、分納でも結構ですので、滞納一掃にご協力下さい。

北陸地区シンポジウム「日本海の自然を守る」開催

高木秀男

毎年恒例となっている北陸地区シンポジウムが6月8日、9日の両日、富山市科学文化センターにて「日本海の自然を守る」というテーマで開催され、約50名の方が参加しました。北陸地区シンポは福井支部が結成された直後から、北陸地方区合同研究会という名前で毎年開催されてきたので、おそらく今年は30回目の開催と思われます。院生・学生や一般市民を含む多数の参加者（シンポの後行なわれた黒部川ダム排砂問題にともなう海底ヘドロ現地調査に参加された漁民の方や、マスコミ関係者を加えると60人近い参加者）が得られたことは、担当した富山支部の努力と環境問題に対する市民の関心の高さを示しています。

当日は次のプログラムに従って、石川支部の田崎和江氏の基調講演と各県から6氏の報告がありました。

田崎和江（金沢大学）	「重油とヘドロの日本海 現場と市民と大学と」
楠井隆史（富山県立大学）	「日本海のプラスチックによる海洋汚染」
高橋 久（河北潟湖沼研究所）	「河北潟の現状と再生」
青海忠久（福井県立大学）	「海洋生物に及ぼす重油汚染の影響」
横畑泰志（富山大学）	「みんなの自然史データと油汚染対策」
沢野伸浩（星稜女子短期大学）	「能登半島における油の残留とボランティア活動」
柴田晴夫（柴田獣医科医院）	「福井県での重油汚染被害鳥類の救護」

重油汚染、ダム堆積物の排出問題などに、精力的に取り組んでいる田崎氏は、活動の中で微生物や紫外線による油の分解などつぎつぎと新しい発見をしたことなど、環境問題に取り組む中であげてきた研究成果について報告されました。もぐらの研究の専門家である横畑氏は、地球上に不要な種はなく、あらゆる生物の保護の必要性を強調しました。沢野氏は、きれいになったと宣伝されていた海岸にもまだ油汚染の残留がみられることを現地調査から示しました。高橋氏は干拓によって環境が変わってしまった河北潟の現状と再生について報告しました。楠井氏は日本海におけるプラスチックによる海洋汚染の現状を、詳細な調査による分析によって示しました。柴田氏は重油汚染で被害にあった鳥類の救護を行なった5年前の経験について報告しました。

青海氏は、遠く舞鶴から参加したにもかかわらず予定を変更して現地調査を含めて2日間フル参加し、専門家としてマスコミ関係者の質問にも答えられていました。青海氏の重油汚染が海洋生物に奇形をはじめとするどのような影響をおよぼしたかという興味ある研究報告は、『福井の科学者』に掲載される予定です。

お知らせ：次回の北陸地区シンポは福井支部が担当で来年4月に開催する予定です。

あんない

日本科学者会議ホームページに会員専用コーナーを新設

日本科学者会議は本部に情報通信委員会を置き、ホームページの充実に取り組んでおり、この度、新たに本部のホームページ内に「会員専用コーナー」を設置しました。現在の内容は「大学改革問題掲示板」と「運用&テスト掲示板」が利用可能となっています。引き続き「一般掲示板」と「イベント投稿コーナー」を準備中で、近日中に利用可能となる予定です。どうぞ本部のホームページもご利用ください。

なお、会員専用コーナーを閲覧するためにはIDおよびパスワードを入力する必要がありますが、IDおよびパスワードについては、支部事務局までお問い合わせ下さい。

昨年12月21日に福井支部結成30周年記念懇談会が福井大学牧島荘で開かれた。出席者ははるばる県外から駆けつけていただいた城谷豊氏、滝史郎氏をはじめ、総勢22名であった。懇談会は福井支部草創期の話題などで盛り上がったが、最近、福井支部の会員の末席に加わった者としては、草創期の支部を作り出していく熱気が伝わってきて、大変楽しい時間を過ごさせてもらった。福井支部の活動もしばしばルーチンワークの繰り返しに陥ることも多いように思うが、草創期のように何かを作り出す熱気が、今求められているのかも知れない。

そして、今年3月16日に福井県国際交流会館にて、福井支部結成30周年記念市民講演会・シンポジウムが「21世紀の地域構造と公共交通のありかた」をテーマに開催された。シンポジストとして大学、市民、官庁から6名の方に出席をお願いし、福井の公共交通のありかたについてそれぞれの視点から問題提起をしていただいた。この記念市民講演会・シンポジウムの参加者は50名近くにのぼり、フロアからの質問の時間にも活発な質問・議論がシンポジストとの間でなされた。

今回の『福井の科学者』は福井支部結成30周年記念特集号とし、記念懇談会での報告2編と、記念市民講演会でのシンポジストの発表の6編を掲載した。巻頭言は、日本科学者会議参与である庄野義之氏にお願いした。大学改革の風が激しく吹き荒れる昨今、氏が提案する「内から考え、外から見る」という考え方は大変興味深い。また、会員の声として、福井支部に長年多大な貢献をしていただいた、佐々治寛之氏、長谷川健二氏、滝史郎氏から自由なご意見をいただいた。三氏の科学者会議に対する視点は違うが、福井支部での活動を通して自分自身の研究のパワーアップを計り、着実に研究を積み上げていったところは共通している。

記念懇談会で草創期からのメンバーが生き活きと当時の活動を語っている姿が目には焼き付いている。何十年が経った後に、あのように生き活きと語れるような活動を福井支部でいたいと思う。

独り言のコラム

教育の効果をはかる

今年はRoboCupなる世界大会が福岡で開催され、私は初めて参加した。RoboCupの中心はロボットでサッカーゲームをするもので、いくつかの実機部門とコンピュータシミュレーション部門からなっている。今年は日本で開かれたためマスコミでも紹介されていた。研究室の学生たちも参加したが、これで4回目である。私もこれまで何回か誘われていたが多忙なため行けなかったが、今回は日本での開催なので息抜きに覗きに行った。会場は福岡ドームの巨大な施設で、RoboCup大会とともに多数の企業がロボットを始めとする先端技術の製品紹介デモのブースが開かれていた。注目の的は当然ながら実機のロボットで、沢山のマスコミが取材に訪れ、また多数の小学生や中学生、高校生が団体で見学にきていた。5日間の会期中には10万人を越す人が見学にきていたようだ。また、会場には沢山のボランティアが人の誘導整理や清掃などに参加していた。

研究室の学生たちは2通りの参加をした。1つはサッカーチームを率いてゲームに臨んだグループの諸氏である。何日も前から調整しているがそれでも足りずに2日前から会場に行き、現場調整を繰り返していた。結果は、1次予選リーグは突破したが2次予選リーグであえなく敗退し、決勝トーナメントには残れなかった。大変残念がっていたが、捲土重来を期してあとのゲームを観戦していた。多くの外国からの参加者と片言の英語で交流して大会参加を楽しみ、前の世界大会で知り合ったグループも参加してきていて、再会を喜んでいて。もう一つは、大会の裏方としてスタッフチームに参加したグループである。コンピュータやコンピュータネットワークの知識と技術を買われての参加である。こちらのグループの諸氏も、朝は8:00から夜は22:00ころまで（交代制ではあるが）、片言の英語をあやつりながら質問に回答し、問題解決の手助けをしていた。時にはプログラムソースのチェックまで相談されていたから、大変な仕事である。次々やってくる海外からの参加者の依頼に対応していくのはそばで見ているも忙しそうであったが、てきぱきしていた。学生たちは研究室にいたときとは全く異なった様子を見せていた。

研究室の学生たちの成長を見ているのは、研究室を預かっているものとして嬉しいし、日本の将来を明るく感じるときである。これこそ教育の効果であると思う。しかし、彼らが活躍できる場が日本に準備できているかということ、暗くなる。製造業が生産拠点を海外に移す産業の空洞化がいわれてかなりになるが、雇用面での空洞化も進んでおりこちらの方も深刻である。ある大手企業の幹部が求人説明に来室したとき、「本当に必要なのはよくできる人、外国から安い労働力が入ってくるから、企画・立案・マネジメントに必要な人材が欲しい。そういう教育をするべきだ。下の方の教育にたまひま掛けるのではなくトップの教育が維持・向上できれば、研究開発の頭脳は日本で供給できるし、日本経済は困らない。」という主旨の発言をした。私は、平均的水準を上げ裾野を広げないと、一時的ならいざしらず持続的にトップの水準を維持しかつ高めることができなくなってしまう、と考えている。「大学を国際的水準の大学へ、トップ30の育成を（今では単純な30ではないそうだが）」という文部科学省の掛け声とダブって聞こえ、人を大切にしない教育政策や経済姿勢に私は言葉を失ってしまった。

それでも研究室の学生たちには日本の将来が掛っている。気を取り直して、福岡から帰福した。

(2002.6.25 OG.)

その1からその6まで、私としては真面目なテーマについて意見を述べてきましたが、今後は少々気軽なテーマを選びたいと思います。そこで今回は「車」について述べます。

日本もアメリカも車社会ですが、住んでみて実感するのは、アメリカの方が、より文化的（精神的）に根強く車というマシンが広く浸透していることです。それは、近所の方と雑談していてふと気が付くことなので、あまり良いサンプルがありませんが、いくつか例を示します。何度か登場した近所のPさんは、初老の女性ですが、大変車の仕組みに精通していましたし、運転も非常に上手でした（縦列駐車は名人芸に近い）。特に車に興味があるわけではありません。私が約10ヶ月間乗っていた中古のホンダ・アコードを彼女が購入してくれたのですが、購入前の質問事項が初老の女性とは思えない内容でした（日本の女性の皆様をバカにする気持ちは全くありません、念のため）。

「排気量はどれだけ？」

「たしか2200ccです」

「何気筒？」

「えっ？」

「いくつシリンダーがあるの？」

「ああ、これは4気筒です。でも、そんなに重要なことかな・・・」

「気筒数が増えると、音が静かだしパワフルだけど、燃費が落ちるのよね。私は環境のことが気になるから、4気筒のエンジンは気に入ったわ。あと、オートクルージングの機能はついているのかしら？」

「・・・」

このような形で、かなり長い質疑応答の後、彼女は大変満足して約1万ドルでアコードを購入してくれました。日本では（私の感じる範囲では）、車はマシンと言うよりも、オーバーに言えば家族の一員・ペット・自分の分身、のように捉えられるケースが多いようですが、アメリカでは（私の接した範囲内では）、車は便利なマシンとして割り切って捉えられていて、老若男女皆さんが車のメカニズムにある程度精通していました。

また、その1とも関係しますが、アメリカ人の独立・自由を重んじる精神文化のためか、車検制度が無いことは有名です。従って、故障して事故を起こす車は、日本よりもたくさんいます。ハイウェイの路肩には、バスとしたタイヤの破片や、大破した車などがあちこちに転がっていました。私も片側5車線のハイウェイを120～130km/hで走行中に、前を走っていた車が突然黒煙を吹き上げ前方が全く見えなくなり、しかもその車が減速し始めたので、前後からの衝突の恐怖の中、10秒間ほど運転するはめになりました。このようなケースでも、「事故を起こす奴の責任だから、何か起こってもそいつが保険が何かでpayすれば良い。万が一、自分の責任を問われる場合は、裁判に持ち込む」と考えるのが一般だそうです。とはいえ、事故を起こしにくい車に人気が集まるのは当然で、当時最も人気のある車は、故障しにくいトヨタのカムリとホンダのアコードでした。

第14回総合学術集会在開かれま

福井支部から、福井空港問題について、第3分科会で報告します。

2名の派遣を予定しています。

派遣旅費のカンパを、会費集金時にお願いします。

期日：9月21日(土)～23日(月)

会場：北海道大学農学部

(科学者会議のホームページに詳細な案内があります。 <http://www.jsa.gr.jp/>)

9月21日 記念講演 金川弘司氏(北大学名誉教授)「北海道における人間と野性動物の共存を考える」(仮題)

9月23日 パネル討論「平和で安全な社会をいかにつくるか 科学者の責務」

第1分科会 「核兵器廃絶・平和問題」

第2分科会 「環境・公害・原子力・エネルギー問題」

第3分科会 「災害・住居・開発・公共事業問題」

第4分科会 「食糧問題」

第5分科会 「医療・福祉・薬害・生命倫理問題」

第6分科会 「水産問題 - 北海道の水産問題を中心に」

第7分科会 「思想・文化・科学論」

第8分科会 「平和軍縮教育問題」

第9分科会 「高等教育および国公立大学の法人化問題」

第10分科会 「科学者・研究者の権利問題」

第11分科会 「科学・技術政策問題」

第12分科会 「女性研究者・技術者問題」